

江戸時代の粋な暮らしを  
現代によみがえらせる

# 長崎チロリ

瑠璃庵

「瑠璃庵」では、  
予約制で吹き  
ガラスの体験  
ができます。興  
味のある方は、  
ぜひ。



竹田礼人さん

1972年、長崎市生まれ。19歳でガラスに魅了され、この世界へ。現在は「瑠璃庵」の二代目としてガラス製造はもちろん、観光客や修学旅行生に吹きガラス体験の指導もしている。

「長崎チロリ」は、一瞬にして見る者の心を奪ってしまふ。見れば見るほどに美しい。

昔から海外との交流が盛んに行われていた長崎は、日本のガラス発祥の地。江戸時代には「ビードロ吹き」と呼ばれるガラス職人が存在し、その高い技術は全国へと広まった。しかし明治時代以降、長崎ガラスの製造は戦争の影響などで、廃れてしまう。それを復元したのが、「瑠璃庵」の竹田礼人さんだ。



チロリの本体はわずか15分ほどで仕上げていく。見事な早業に驚く。

礼人さんは長崎ガラスについて研究する過程で、長崎チロリのデザインに魅了され、その復元にも成功した。そしてその技術は、息子の礼人さんに受け継がれている。

ガラスは時間との勝負。ガラスに命を吹き込むように動く礼人さんの手は、まさに魔法のよう。長崎チロリの製造は難しく、十年ほどの修行を積んで、ようやくスタートに立てるといふ。技術習得の難しさを身を

もって知っている礼人さんは、「ガラスは千百度の熱で作るので、高い温度を保てなかった江戸時代に、どうやっ

てこうしたものを作ることができたのか。昔の職人の技術力の高さに驚きます」と、先人たちへの想いを口にする。

江戸時代、チロリは冷や酒用の酒器として使われていたという。優雅なひとときを演出する斬新なデザインに向き合うと、当時の人たちの豊かな心が見えるようだ。

礼人さんはガラスの魅力が「触れないからこそ面白さ」だと話す。確かに素材に触らずにモノづくりをするというのは、ガラスならではの。デザインの肝ともいえる注ぎ口の部分は、一気に息を吹き込む。そのためカーブの角度は毎回異なり、世界にひとつとして同じものはない。復元から約三十五年。長崎チロリは、江戸時代の粋な暮らしを今の長崎に伝えている。

長崎の  
デザインを  
旅する  
Design  
in  
Nagasaki



杯とセットで楽しむと、  
いっそう優雅。

ミニコンプラ瓶は、一輪挿しとして使われる方が多いですね。それぞれのアイデアで、楽しんでください。

太田一彦さん

1959年、波佐見町生まれ。1930年創業の「重山陶器」の三代目。「ミニコンプラ瓶」をはじめ「コンプラ小皿」など、個性的な商品を社内のデザイナーとともに開発している。



# ミニコンプラ瓶

重山陶器

やきものの町で生まれた  
歴史を伝える小さな瓶

きものの町として知られる波佐見町。約四百二十年前から技術は連綿と継承され、江戸時代後期には日本一の磁器生産量を誇っていたという。その頃から大正時代にかけて盛んに焼かれていたのが「コンプラ瓶」。コンプラ瓶は海外輸出用の酒や醤油を入れるための瓶で、当時、長崎を出島からオランダ東インド会社を介してオランダやインドネシアなどに向けて輸出されていた。

このコンプラ瓶をモチーフに生まれたのが「ミニコンプラ瓶」。開発者である太田一彦さんはこう話す。「一九九九年、波佐見町にやきものが伝わって四百



手の平に乗る小さなサイズで、色のバリエーションも豊富なため、様々なテイストの部屋に合うのがうれしい。

年という記念の年に、複数の窯元が力を合わせ、コンプラ瓶を復元したボトルに焼酎を詰めて販売しました。それをきっかけに、波佐見焼といえはコンプラ瓶という歴史をもっと多くの人に広めたいと考えるようになりしました。太田さんは「暮らしの中に気軽に取り入れられるように」と、サイズを小さくすることを提案し、カタチにした。

コンプラ瓶には酒を意味する「JAPANSCH ZAKY」もしくは醤油を意味する「JAPANSCH ZOYA」というオランダ語が書かれている。「当時の職人たちにはオランダ

ダ語の知識はなかったでしょう。ですから当時のコンプラ瓶の『J』の文字の上には、小文字に使う『・』が打たれています。商品には、こうした細かい点も反映しました。

こだわりの詰まった商品ながら、太田さんは「そんなにたくさん売れるわけでもないんです」と笑う。太田さんの中にあるのは「この町で、コンプラ瓶をモチーフにした商品を作り続けることこそが大切」という強い気持ちだ。十色のカラー展開をしているミニコンプラ瓶。部屋に飾れば、歴史が暮らしに溶け込んでゆく。